

## 【フォーラム】

多言語の教育関係者が集まる「参加」型研究会を  
いかに創り出していくか

外国語授業実践フォーラムの活動から見えてくるもの

中川 正臣\*

(目白大学)

亀井 みどり

(上智大学)

## 概要

言語教育において、学会や研究会などの実践者や研究者が集う場は、明日の教育のために人や思考、情報をつなぐ重要な役割を担う。本稿で取り上げる外国語授業実践フォーラムも、発足から今日までの約5年間、外国語の授業実践に向き合い、共に学び合う参加型研究会として活動してきた。しかし、発足から現在まで、運営スタッフの一員であり、一参加者でもある私たちは、運営スタッフ主導の会合運営や目標達成のためのワークショップなどに疑問を持つようになった。そこで、これまで漠然と描いていた様々な外国語教育関係者が集まる参加型研究会の「参加」という概念に注目し、外国語授業実践フォーラムはいかなる「参加」を実現しようとしてきたのか、本稿の執筆者である私たちは、いかなる「参加」を実現しようと思っているのかを問い直すことにした。本稿ではこれまでの外国語授業実践フォーラムにおける「参加」の概念を批判的に省察し、多言語の教育関係者が集まる参加型研究会の1つの方向性を示す。

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

キーワード 言語教育, 多言語, 参加型研究会, 教育実践, 参加

## 1. 私たちの問題意識

外国語授業実践フォーラム(以下:実践フォーラム)は、特定の外国語、特定の教育機関に捉われず、外国語教育(日本語教育も含む)に携わる人々が集い、授業実践に対する振り返りと教育現場での活用について語り合うことを目的として発足した。実践フォーラムではこの目的の下、参加者それぞれが

持っている問題意識を共有し、他者と協働しながら問題解決に取り組む参加型研究会を目指してきた。

しかし、私たち<sup>1</sup>は、会合を重ねながら3つの問

<sup>1</sup> 本稿における「私たち」とは本稿の執筆者2名を指す。「私たち」は外国語授業実践フォーラムの発起人の一員であり、現在も運営スタッフの一員であるが、同時に一参加者でもある。本稿は、外国語授業実践フォーラムの運営スタッフを代表して執筆したのではなく、運営スタッフと参加者を兼ねた立場にいる「私たち」の視点から論じたものである。

\* E-mail: masaomin55@gmail.com

題意識を持つようになった。1つ目は運営スタッフが各会合の目標を立て、参加者がその目標を達成できるよう導くという、スタッフ主導の会合になっていたこと、2つ目は目標中心のワークショップを行うことで、参加者が授業実践に対して抱える日々の悩みを十分に共有できなくなっていたこと、3つ目は各会合で実施している参加者アンケート調査が、単に参加者のニーズを把握するため、もしくは次回の会合を企画するための参考程度の役割しか担っていなかったことである。

これらの原因の1つには、発足から今日まで運営に携わり、かつ参加者の一員でもあった私たち自身が、参加型研究会の「参加」を漠然としか捉えてこなかったことが挙げられる。そこで、私たちはこの問題を解決するために、まず「参加」という概念から問い直す必要があると考えた。池田(2007, p. 221)によると、「参加」の概念には参加の当事者性、つまり参加者が置かれた状態とかかわる「参加の様態」、参加してからの時間経過や参加者間の関わり合い、参加の場に見られる権力関係などと関連する「参加の強度」、そして、参加を通じて得られる何かしらの変化とかかわる「参加の効果」という3つの視点が含まれるという。私たちは、運営スタッフであろうと、参加者であろうと、この「参加」の3つの視点は個人によって異なってよいと考える。例えば、会合テーマに対する関心から「参加」する人もいるであろうし、自分が所属する教育機関に同僚性を築くため、まずは外の同僚性<sup>2</sup>を築くことを目的として「参加」する人もいるであろう。

<sup>2</sup> 同僚性とは「教師たちが互いに実践を創造し交流し合い専門家として育ち合う連帯」を指す(佐藤, 1999, p. 163)。佐藤(1999)は学校内からの改革が行われなければ、学校外からどんな改革が断行されようと変化しないという。しかし、学校内からの改革が難しい時、まずは外の同僚性を築き、徐々に内の同僚性を建設していく場が必要である。その場を提供することが実践フォーラムの役割でもあると考える。

しかし、その多様性の中でも「参加」のあり方については問い続けなければならない。なぜなら、外国語教育の関係者が集まる場の「参加」について考えることは、各会合の目的や価値、評価、今後の方向性、さらには研究会そのものの存在意義にも深く関わる問題であるため、その問いを誰もしなくなった時、研究会はあるべき姿や今後の方向性を見失い、形骸化してしまうと考えるからである。

本稿では、実践フォーラムが発足から現在(2017年5月)まで、いかなる「参加」を実現しようとしてきたのか、「参加」の何が実現できて、何が実現できていないのかについて批判的に省察しながら、私たちがこれから実践フォーラムにおいて実現していきたい「参加」の概念について論じる。また、この議論を通じて、個々の外国語とその教育の枠を超え、言語教育について考える場への「参加」について、1つの方向性を示したい。

## 2. 実践フォーラム発足の経緯

従来の外国語教育では個々の外国語とその教育の特徴が強調され、主に言語別の研究活動が行われてきた。例えば、私たちが携わっている韓国語教育においても、「韓国語」や「朝鮮語」、「韓国朝鮮語」といった名称のついた学会や研究会が国内外に数多く存在する。しかし、私たちは外国語教育そのものを取り上げた教師研修に参加する中で、外国語教育という広い観点から定期的に授業実践を見つめ直したい、個々の外国語教育という枠に捉われず、外国語教育を起点に教育をより良くしたいという思いを強くしていった。

実践フォーラムが発足した2012年は、国際文化フォーラム(2012, 以下『めやす』)が刊行された年でもあり、その実践例がWEB公開されると共に、植村(2012)など『めやす』の活用に着目した文

献が登場しはじめた時期である<sup>3</sup>。また、当時は日本の外国語教育制度の改善などを目的に、日本外国語教育機構（JACTFL）が立ち上がりようとしていた時期でもあるが、私たちは、より教育現場に近い立場で、外国語のより良い授業実践について共に学び合う場を求めていた。このような流れの中、国際文化フォーラム<sup>4</sup>が主催する教師研修の参加者であった有志が集まり、2012年8月に実践フォーラムを立ち上げるようになった。

### 3. 第1回から第11回までの活動内容

発足当初、私たちの主な関心は『めやす』という枠組みを活用した授業実践を通じて得られる知見の共有にあった。第1回会合（2012年9月）から第11回会合（2016年1月）までの約3年間は『めやす』のキーワードである「言語」、「文化」、「21世紀型スキル」をテーマの柱に、講演や実践報告（報告）、ワークショップ（WS）を通して参加者との議論を重ねてきた。具体的な活動内容は表1の通りである。

各会合のテーマと内容を基準にこれまでの活動内容をまとめると、以下のように第1期から第3期に分けられる。

第1期（第1～4回）：「言語領域」の「わかる、できる、つながる」といった能力観の理解や目標設定、評価をテーマに据え、教育現場における応用とその効果について議論した。

第2期（第5～8回）：「言語領域」に加えて「文化領域」、「グローバル社会領域」へとテーマ

を広げ、言語教育そのものに対する問い直しと実践の共有を行った。

第3期（第9～11回）：「グローバル社会領域」をテーマに、学習者の立場になって活動を体験すると同時に、活動の意義や留意点、実践する際の問題点などについて共有した。

第1期と第2期の会合テーマは、毎回の会合で実施してきたアンケートを参考に運営スタッフが設定したものであった。具体的には、テーマに基づき運営スタッフが目標を立て、参加者がその目標を達成できるよう導くという活動形式が採られた。そのため、徐々に研究会と教師研修の境界が不明瞭になっていった。また、各会合では、グループごとに架空の状況を想定し、授業案や評価案の作成・共有に取り組み傾向にあった。しかし、会合を重ねるにつれ、研究会として仮想的な授業設計をすることへの疑問が生まれ始めた。もちろん、様々な外国語教育の現場で教える教師が集まって1つの仮想的な授業について考えることも、そのプロセスにおいて新たな気づきが生まれたり、授業実践のヒントが得られるという点で意味のある活動だと言える。しかし、そこで扱われてきたのは「私の授業実践」ではなく、あくまでワークショップの中で与えられたゴールを達成するための架空の授業実践であった。また、目標の達成や成果物を重視したワークショップを進めながら、参加者の普段の悩みや問題を取り上げない研究会は果たして参加型研究会と言えるのか、という疑問を持つようになった。

第3期には、第1期、第2期の反省を踏まえ、参加者が現在直面している授業についてありのままを語り合い、問題点や課題を見つけ、協働的に解決していくことを目指した内容へと方向の転換を図ることになった。こうして試行錯誤を重ねるうちに、実践フォーラムには様々な外国語を担当する教師が集まり始めた。図1は、第1回から第11回会合の担当言語別参加者数をまとめたものである。

<sup>3</sup> 『めやす』とは日本の高等学校における中国語・韓国語学習の目標、評価、学習領域など、教育活動全般に関する枠組みと実践例を示したものである。現在は大学や民間学校など様々な教育現場で、様々な言語の教育実践に活用されている。

<sup>4</sup> 国際文化フォーラムは様々な言語教師を対象に、2009年から現在まで教師研修を実施している。詳細は国際文化フォーラム（2015）参照。

表1. 第1回から第11回会合までの活動内容

回	実施日	テーマ	内容
1	2012年 9月9日	言語領域における「わかる」「できる」「つながる」とその授業実践	報告：①高校における外国語教育の現在②大学における韓国語の授業実践報告 WS：言語領域における「わかる」「できる」「つながる」とその授業実践
2	2012年 12月28日	言語領域における「わかる」「できる」「つながる」の概念と授業実践	報告：言語領域における「わかる」「できる」「つながる」とは－具体的な授業実践を例にして WS：言語領域における「わかる」「できる」「つながる」と授業実践
3	2013年 4月14日	学習目標について考える	報告：学習のめやすにおける学習目標の設定 WS：単元目標について考える
4	2013年 9月15日	外国語能力評価について考える －学習支援のための評価とは－	報告：「外国語学習のめやす」における評価 WS：学習支援のための評価とは
5	2014年 1月12日	学びを深める“文化”の再考 (国際文化フォーラムとの共催)	講演：学びを深める“文化”の再考 WS：学びを深める“文化”の再考
6	2014年 4月27日	文化からはじまり、言語につながる外国語授業	講演：文化からはじまり、言語につながる授業 WS：文化分析と文化能力の規準
7	2014年 9月15日	文化能力の評価活動をデザインする	報告：授業実践報告「私の大切な場所」 WS：文化能力の評価活動をデザインする
8	2015年 1月24日	セマティック・ユニットへの挑戦－言語、文化、そしてグローバル社会へのひろがり－	講演：汎〈外国語学習〉主義でいこう－ことばを学ぶ中で生きていくための全てを学ぶ－ 報告：外国語学習者同士で繋がる－価格を通して世界を知る－ WS：セマティック・ユニットを作ってみよう－つながるをキーワードに－
9	2015年 4月19日	外国語の授業におけるICT活用を考える－意義の問い直しと新たな実践のために	報告：授業実践報告「文法事項の「気づき」と「体験」－iPadのプチ導入事例－ WS：外国語の授業におけるICT活用を考える
10	2015年 9月13日	「協働学習」に基づく教室活動のデザイン－体験から実践を考える－	WS：「協働学習」に基づく教室活動のデザイン
11	2016年 1月10日	高度思考力を養うための外国語の授業とは	報告：①ドイツの街紹介プロジェクト－限定された分量でいかに効果的で魅力的な報告をするか－②言語と思考の相互作用を通じた意味づけ促進の活動－「私たちが今、交流相手に紹介したいこと」をテーマに－③主体的・協働的な学びを育むジグソー活動－「翻訳を通して中国理解を広げよう」プロジェクト－ WS：高度思考力を養うための外国語の授業とは「評価」「プレスト」「ジグソー」3グループ同時進行 参加者体験型ワークショップ

注. 2017年5月現在、第13回会合まで実施。

特に、第5回会合は国際文化フォーラムと共催、第11回は九州にて中国語教育学会、福岡韓国朝鮮語教育研究会との共催で会合を行うことで、様々な外国語教育の関係者の参加が実現した。

この段階で、私たちは、発足当初から目指してき

た「多言語の教育関係者が集う参加型研究会」に近づいているという手応えを感じていた。しかし、その一方で、運営スタッフが思い描く参加型研究会の「参加」と、参加者が望む「参加」は同じ方向を向いているのか、あるいは同じ方向を向く必要がある

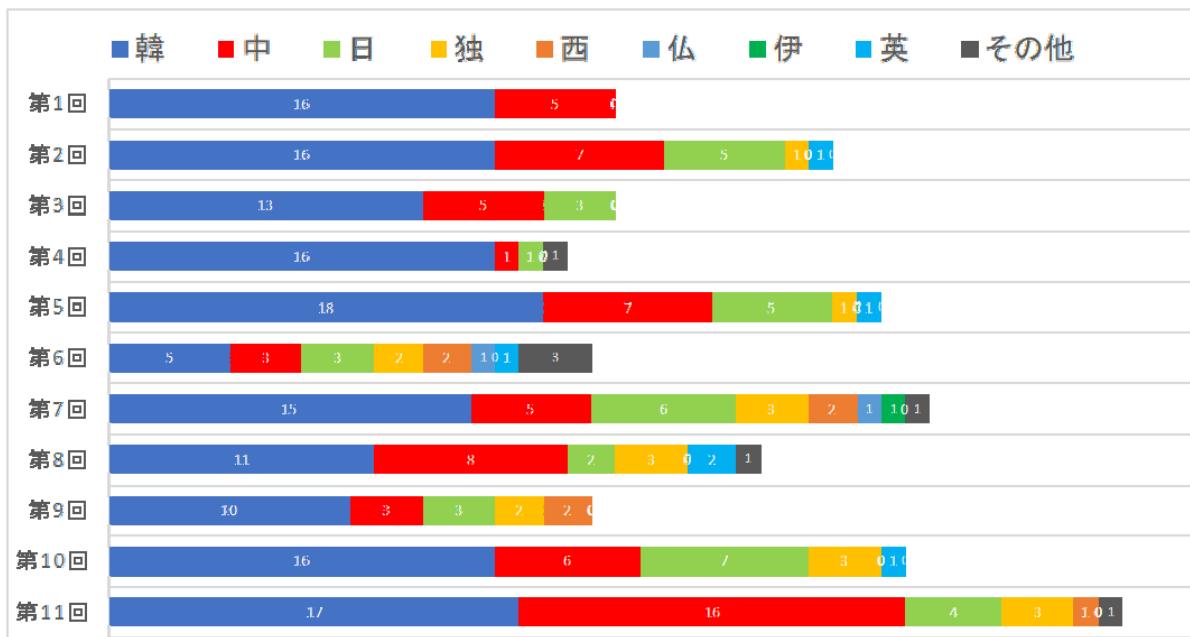


図 1. 外国語授業実践フォーラム第1回から第11回会合までの担当言語別参加者数：担当言語は会合申し込み時基準。

のかという疑問が浮かんだ。これは「多言語の教育関係者が集まる参加型研究会」の「参加」という概念を問う疑問でもある。単に多言語の教育関係者が集まるのが「参加」ではないはずだからである。

また、この時期は、発足から約3年が過ぎ、『めやす』のテーマに基づく会合に一区切りつく節目であり、運営スタッフ内では、実践フォーラムは今後どのような活動をしていくべきか話し合いが必要だという意見も出ていた。そこで、私たちはアンケートに記述されている参加者の声をもとに、これまでの活動と今後の活動について考えることにした。

#### 4. 参加者アンケートの分析と参加者と共に考えた今後の活動内容

##### 4. 1. 参加者アンケートの分析

参加者アンケートの分析は、第2回から11回会合で実施したアンケートのうち自由記述文を対象に行った。私たち2名が分析者として、自由記述文を写した個別のカードを作成し、類似している記述をまとめてキーワードを抽出した後、それらが持つ意味を縦・横断的に探った。

まず、第1期から第3期までの記述を縦断的に概観すると、会合のテーマが「言語」から「文化」、「グローバル社会」に移るにつれ、参加者の意識も「個」から「コミュニティ（つながり）」へと移っていく傾向が見られた。

次に、多言語の教育関係者が集まる場についての意見を分析すると、「同一言語の教育関係者の集まりでは得られない刺激や新しい視点・アイデアを得ることができる」、「自分の抱えている課題が担当する外国語によるものなのか、他の外国語にも共通するものなのかがわかる」、「特定の言語の教育関係者の集まりでは優先的に扱いにくい汎言語的なテーマが扱いやすい」の3点に集約され、様々な外国語教育に携わる参加者の協働を通して、お互いの同質性や異質性に対する気づきを得られる場を参加者たちが肯定的に捉えていることがわかった。

さらに、実践フォーラムの活動内容に対する要望を分析したところ、「実践の共有」、「実体験の共有」、「アイデアの共有」という3つのキーワードが浮かびあがった。1つ目の「実践の共有」は、ある実践報告を聞き、具体的な授業内容や授業方法に加え、学習者の反応や変化などの情報を共有すること

を指す。2 つ目の「実体験の共有」は、参加者が学習者の立場になり、共にある学習活動を体験することを指す。3 つ目の「アイデアの共有」は、実践例や実体験の共有をも含めた、普段の授業実践における問題点や悩みを共有することを指している。

私たちは、この参加者アンケートの分析を通して参加者の声を集めるという作業からもう一步踏み込み、参加者の声から浮き彫りになったものを実現するための具体的な方法を、参加者と運営スタッフが共に考えていくべきだと考えた。そこで、実践フォーラムの会合においてこの参加者アンケートの分析結果を共有し、今後の活動を考える機会を設けることを他の運営スタッフに提案し、実行に移すことにした。

#### 4. 2. 3 つのキーワードをもとに参加者と考えた今後の活動内容

以上のような経緯から、2016年7月9日に開催した第12回会合では、これまでの活動内容とアンケートの分析結果を報告した後、参加者の要望として抽出された3つのキーワードに基づく今後の活動内容について参加者全員で考えることにした。参加者から挙げられた活動のアイデアの一部を記すと以下の通りである。

- ・失敗例に焦点を当てた実践報告をもとに、改善策を参加者で議論する
- ・それぞれが担当する外国語の授業実践で行われている語彙学習のインプット活動を体験する
- ・実践や解釈を1つのサイクルとして共有する（ある実践報告を聞き、解釈・分析した後、会合参加者がその授業で用いられた方法を体験し、さらにその実践例を報告する）
- ・実践共有をSNSなどで事前に行い、その上で会合当日に議論する

また、参加者の中からは、今後、複数のポスター

発表や実践の持ち寄り会をする場合、共通のテーマがあったほうが良いかどうかといった議論や、会合をカフェでおしゃべりするような雰囲気にし、その中からアイデアを得られるような形にできないか、などといった、会の運営方法に関わる意見も挙がった。これらのアイデアを基に、2017年2月25日に開催した第13回会合（協働実践研究会との共催）では、参加者の様々な授業実践を共有した後、「お昼の語り場」というセッションを設けた。このセッションは、当日のポスターや口頭で発表された授業実践について、参加者が自分の教育現場や授業実践に照らし合わせ、意見交換をする試みであった。

このように、アンケートを通して個々の参加者が取り上げてほしいテーマを汲み取るだけでなく、そのテーマはどのように実現できるのかについて、参加者と運営スタッフが話し合うことで、共に創り上げる参加型研究会へ一歩前進したと言える。

以上のように、実践フォーラムにおける「参加」は、徐々に形を変えながら実現されてきた。しかし、ここで述べたものは、あくまで実践フォーラムの活動に参加者をどう巻き込むかという企画運営面での「参加」の実現であり、実践フォーラムが主眼とする「様々な外国語教育の関係者が自分の授業実践に向き合うための学び合い」という内容面での「参加」の実現とはいまだ距離があった。次章では、この様々な外国語教育の関係者が自分の授業実践にどう向き合い、学び合うかという内容面での「参加」の課題について、「外国語教育」から「言語教育」への転換と、「授業実践」から「教育実践」への展開という1つの方向性を示す。

## 5. 私たちが実現したい「参加」とは

### 5. 1. 「外国語教育」から「言語教育」への転換

本稿の冒頭で述べたように、実践フォーラムは外国語教育に携わる人々が集い、授業実践について語

り合うことを目的として発足した。この「外国語教育」には「日本語教育」も含まれ、現在、様々な外国語教育に携わる参加者と運営スタッフが実践フォーラムを構成している。しかし、4. の分析結果から浮かび上がった「実践の共有」や「実体験の共有」、「アイデアの共有」を「外国語教育」という枠での議論にとどめて良いのだろうか。

教育関係者が日々接する教育現場には、様々な背景を持つ学習者がいる。一例として、私たちが担当する韓国語の教室において、学習者の母語だけを取り上げて見ても、日本語、英語、中国語、タガログ語など、様々な母語を持つ学習者が共存している。また、韓国語を母語とする学習者が、日本語の習得や韓国語学習者との交流を目的に韓国語の教室に参加するというケースも見られる。さらには、近年、教育現場におけるインクルーシブ教育の導入やユニバーサルデザイン化も進められている。このような学習者の背景の多様化を考慮すると、実践フォーラムも「外国語教育」の関係者が集まる場から、外国語、国語、手話などを含め、広く「言語教育」の関係者が集まる場への転換が求められる時期にあると考える。そして、このような場の転換は、参加者が担当する外国語の授業実践を見つめ直すことだけを目的にするのではなく、「言語教育」という広い視野で授業実践を見つめるといふ、内容面での「参加」の概念の捉え直しも意味しているのではないだろうか。

## 5. 2. 「授業実践」から「教育実践」への展開

前述した「外国語教育」から「言語教育」への転換は、単に実践フォーラムで扱う言語教育の幅を広げることを意味するものではない。多言語の教育関係者が集まり、言語教育について考えるという行為は、言語教育の現状に対して問題を提起し、言語教育そのものを変えていく力を持ち得る。

実践フォーラムでは、2017年2月25日に開催した

第13回会合（協働実践研究会との共催）の中で、「学習者・教師の多様性を活かした学習デザイン——『協働』をテーマにした言語教育の環境整備を考える」をテーマとしたパネルディスカッションを共催団体と共に実施し、様々な背景を持つ学習者と教師の多様性をいかに「言語教育」に生かしていくかということ議論した。また、2017年9月23日に開催した第14回会合では多様な背景を持つ言語学習者への学習支援を取り上げ、2018年3月31日に開催予定の第15回会合（於関西大学）では、「〈すべての学習者〉の学びを保障するために我々は何を変えるべきか」というテーマのもと、言語教育におけるインクルージョンという概念や学習のユニバーサルデザイン化について議論する予定である。

このように多言語の教育関係者が一堂に会し、言語教育とそれを取り巻く社会について考えることは、もはや「授業実践」の域を超え、「教育実践」に関する議論と言えるであろう。私たちは多言語の教育関係者が集まる場だからこそ、言語教育とそれを取り巻く社会の本質に迫ることができると思う。そのためにも私たちは、実践フォーラムにおいて「授業実践」のみ対象にするのではなく、「教育実践」に関して議論する場まで「参加」の概念を広げていくべきだと考える。

## 6. おわりに

本稿では、参加型研究会を目指す実践フォーラムにおいて、私たちが実現したい「参加」の概念を、企画運営面と内容面という二つの側面から論じた。その議論の中で辿り着いた「多言語の教育関係者が集まる場だからこそ、言語教育とそれを取り巻く社会の本質に迫ることができる」という信念は、実践フォーラムの発足時に私たちが漠然と抱いていた「参加」の概念にはなかったものである。これは、まさに私たちが実践フォーラムという教育研究活動

の実践を通して得た「参加」に関する実践知である  
と言えよう。

実践フォーラムは、いまだ発展途上のコミュニティである。本稿に対し、読者からのご指摘やご助言をいただくことで、より良い実践共同体としての成長、さらには社会における言語教育への貢献につながると思う。今後も参加者、そして他団体、他分野の教育関係者との協働の中で、実践フォーラムのあるべき姿を追い求めていきたい。

#### 文献

池田光穂 (2007). 「現場力」研究術語集.

*Communication-Design, 0*, 221.

植村麻紀子 (2012). 21 世紀型スキルの養成と中国語教育——「つながる」をキーワードに『中国語教育』10, 105-125.

国際文化フォーラム (2012). 『外国語学習のめやす——高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』ココ出版.

国際文化フォーラム (2015 年 4 月). 『外国語学習のめやす』に関連する研修等の報告. <http://www.tjf.or.jp/meyasu/support/topics/post-3.php>

佐藤学 (1999). 教師の自律的な連帯へ. 佐伯胖, 藤田英典, 佐藤学 (編) 『学び合う共同体』 (pp. 163-171) 東京大学出版会.



## Forum

## How to set up a participatory workshop for those involved in multilingual education: What has been revealed by Foreign Language Action Teaching Forum activities

NAKAGAWA, Masaomi\*

*Mejiro University, Tokyo, Japan*

KAMEI, Midori

*Sophia University, Tokyo, Japan*

### Abstract

In language education, events where educators and researchers can gather, such as academic conferences and workshops, play an important role in connecting people and communicating ideas and information, all of which benefits the future of education. The Foreign Language Action Teaching Forum (established and active for roughly five years) is a participatory workshop where those involved in foreign language education can address issues related to foreign language teaching, and learn from each other. As both operating staff members and workshop participants since the Forum's establishment, we began to have doubts about the effectiveness of meetings led by the operating staff and workshops in achieving the Forum's objectives, as the meetings and workshops had failed to address participants' essential concerns and issues with respect to foreign language teaching. Therefore, we have focused on the hitherto vaguely defined concept of "participation," with respect to participatory workshops for those involved in a variety of foreign language education related activities. And we have decided to reevaluate the type of participation that currently exists in the Forum, and the type of participation we aim to achieve in the future. This paper critically reflects on the existing concept of "participation" with respect to the Foreign Language Action Teaching Forum, and sets out a future direction for participatory workshops for those involved in multilingual education.

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

*Keywords:* foreign language education; multilingual; participatory workshop;  
educational practice; participation

---

\* *E-Mail:* masaomin55@gmail.com